



Title	<紹介> 堤和博著『蜻蛉日記上巻前半部研究』
Author(s)	篠原, 美夏
Citation	語文. 2022, 119, p. 56-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95248
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

堤和博著『蜻蛉日記上巻前半部研究』

篠原美夏

本書は、『蜻蛉日記』上巻前半部における地の文・和歌の詳細な読解を行う十五編の論考を収載する。『蜻蛉日記』は、応和二（九六二）年春までの約三年半の記事を欠くが、それよりも前の部分を本書では「蜻蛉日記上巻前半部」としている。以下、本書の論考部分の構成を目次によって示す。

第一章 兼家からの求婚場面、「序段」（12番歌）

第一節 上巻前半部の「序段」としての兼家からの求婚場面

第一節 補

第二節 兼家からの求婚歌到来の場面

第三節 上巻の兼家からの求婚と『うつほ物語』あて宮求婚譚

第二節 「返し、いろ古めきたり」考（19 20番歌）

第三章 兼家の嘘の言い訳を求める道綱母の歌語り享受

第四章 桃の節供の翌日の贈答歌の場面（29 31番歌）

第一節 桃の節供の折を逸した贈答歌

第二節 桃の節供の日とその翌日の場面

第五章 道綱母と時姫の二組の贈答歌（34 35番歌、41 42番歌）

第六節 町の小路の女の存在と関わって―

第六章 離婚状態になった時の道綱母の歌（40番歌）

―「矢といふにこそ」詠をめぐって―

第七章 離婚状態を脱した時の贈答歌（43 45番歌）

―浜千鳥の贈答歌をめぐる考察―

第八章 46 48番の贈答歌の場面を中心とした考察

第九章 49 52番の二組の贈答歌の場面を中心とした考察

―道綱母にとつての和歌、兼家との贈答歌―

第十章 「さ夜ふけてかくやしぐれのふりは出づ」兼家に対する

道綱母―57番歌の場面―

第十一章 「若き御心（心地）に」考―上巻の侍女の言動―

第十二章 道綱母と兼家の長歌贈答をめぐる考察（58 64番歌）

いずれも二〇〇六年から二〇一八年までに発表された論文が基

となっており、『蜻蛉日記』の展開に沿うように再構成されている。旧稿から大きな変更はほぼ加えられていないが、旧稿発表後

に公表された論文に対する意見を含む付記が加えられた章もある。

また、新たに書き下ろされた「緒言」「結言」においては、本書全

体を貫く読みの方針や結論が簡潔にまとめられており、本書の目

指す方向が明示されている。なお、著者・堤和博氏は二〇〇九年

に『和歌を力に生きる―道綱母と蜻蛉日記―』（新典社）を刊行し

ており、本書は、時にはその考えを改めながら、考察をさらに深めた論考が収められている。

第七章では、『蜻蛉日記』上巻前半部を以下の四つの場面に区分けすることが提案された(二六七頁)。

① 兼家の求婚から結婚成立時の後朝まで

② 町の小路の女の存在発覚までの新婚期

③ 町の小路の女の存在発覚以降

④ 町の小路の女が兼家の寵を失って以降

本書において、①にあたる部分の考察は主に第一章で行われている。兼家の求婚方法について、他文献との比較も交えながら分析し、道綱母の理想や期待からは外れたものであったことを示した。また、道綱母の和歌への拘りにも言及している。

④の場面については、特に「返し、いと古めきたり」という道綱母本人による評言に焦点が当てられ、第二章で分析されている。氏は「自己卑下」がこの部分にのみ存在することに注目し、その理由について、道綱母の返歌における「切り返し」の緩さという新たな観点を提示した。加えて、③以降の兼家との関係性悪化に繋がる流れも指摘した。

④の「町の小路の女の存在発覚以降」の期間における記事に関しては本書の様々な章で触れられているが、第三章から第七章で中心的に取り上げられている。氏は道綱母と兼家の関係性の変化を捉え直し、道綱母の感情の変化を丁寧を追った。第七章では、記事構成について、道綱母の詠歌と兼家との贈答歌を中心に整理さ

れている。これにより、④の時期に兼家への贈歌が減っていることが視覚的にも確認できる。

④の期間については、それまでの区分の議論や結論も踏まえながら、主に第八章から第十二章で検討されている。第十二章では『蜻蛉日記』上巻前半部のクライマックスとも言える長歌の贈答に関して論じ、上巻の記事の空白期間が生じた要因についても言及している。

氏が「行間(それかなり広い行間)を注意深く読まなくてはならない」(二五六頁)と述べるように、『蜻蛉日記』には記されなかった出来事も実際にはあったと想像される。そのため、記事同士の関連や記されていない道綱母の感情について、どのように読み解くかは難しい問題である。加えて、道綱母が「自分が不幸に見える面を強調し、幸福に見える面は載せない執筆態度」(三六九頁)を意図的に取ったことを強調し、叙述面と実際の道綱母の人生や当時の感情を区別して捉える必要性をも提起した。

こういった『蜻蛉日記』の読解における困難の中で、氏は散文・和歌の一言一句に気を配り、膨大な先行研究を参照・批評しながら、矛盾のない読みを行っている。また、複雑な文章構成を秩序立てて整理し、「和歌を力に生き」た道綱母の様相・心情の変化や価値観を明らかにした。今後の『蜻蛉日記』研究に欠かせない成果であろう。

(新典社、二〇二〇年一〇月、四二八頁、一一、五〇〇円+税)

(しのはら・みか 本学大学院博士前期課程)